

大阪は‘まち’がほんまにおもしろい

まぼろしの 浪華の名橋 渡りけり

～鯉座橋から白髪橋、四ツ橋まで～

昭和46年(1971)に埋め立てられて消滅してしまった西長堀川。しかし江戸時代は大阪湾、木津川と船場、島之内を繋いで、天下の台所・大坂の一大動脈の運河でした。木材市や三菱ゆかりの土佐稲荷神社、新町砂場、電気科学館、四ツ橋など、西長堀川沿岸の物語を訪ねてみましょう。



⑦ 白髪橋交差点

鯉座橋と同じく、元和8年(1622)から明暦元年(1655)までの間に架設されたと考えられています。北詰は現在の新町3丁目、南詰は現在の北堀江3丁目にあたり、どちらも当時は白髪町でした。橋名の由来は、新羅船がここに着岸して、後世、それが訛って白髪町・白髪橋となった説(摂津名所図会大成)や、土佐藩が自国の白髪山から木材を伐出して、当地に材木市場を設けたのが由来とする説(西区史)などがあります。江戸時代には阿彌陀池の和光寺と、寺の東側に繁昌した16軒の水茶屋への参詣遊山の人が賑わったといわれています。

⑧ 大阪木材市 売市場発祥の地

元和末年(1622)頃、土佐藩の申請で材木市が立売堀川で始まり、土佐藩が蔵屋敷を白髪町にかまえると、西長堀川でも材木市が許可されて、土佐、日向、紀州、阿波、尾張など諸国の材木が集まり、西長堀橋南詰から富田屋橋、問屋橋、白髪橋にかけて浜側は、昭和にいたるまで年中、材木市が開かれました。戦後、水質汚染が進み、舟運利用が減少したため、西長堀川は埋め立てられましたが、今でも堀江界隈を丹念に探索すると、材木商の看板などが点在しています。

⑨ 間長涯天文観測の地

間長涯(1756~1816)は江戸中期の暦学者・天文学者です。名は重富、宇は大業、家は長堀の十一屋という質屋で通称を五郎兵衛といいました。麻田剛立から天文学を学び、師の剛立から推薦されて、江戸に行って寛政9年(1797)に、寛政歴を完成。その功で幕府から直参取り立ての話が出ましたが、これを辞退して帰阪しました。大坂では英国製の観測器具、技術を研究して、富田屋橋で天体観測に従事。長涯が橋中で観測を始めると、市民が通行をとめたといひます。卓越した観測技術は、弟子の伊能忠敬にも伝えられ、日本地図作成に大いに役立ちました。「間長涯天文観測の地」の碑は大坂市によって長堀川ほとりに建てられましたが、長堀川埋め立てでグリーンプラザ内に移されました。

⑩ 「ここに砂場ありき」石碑

豊田秀吉が大坂城を築城したさいに、大坂市中各地に資材置き場が設けられましたが、新町には砂場の蓄積場がありました。工事関係者が多く集まり、その人々に種類を提供する店「いすみや」「津の国屋」などが開業したと古文書にあります(天正12年・1584年)。石碑は、本邦産物店発祥の地であるとして、大阪のそば店誕生400年を祝う会が建立したものです。

⑪ 「改良演劇発祥の地」石碑

かつて新町南公園の北側に新町演舞場がありました。新町廊の芸妓たちが踊りを披露した舞台で、春になると「浪花踊」が上演され、大阪に春の訪れを告げました。戦後、演舞場は書籍取次業の大阪屋となりましたが、社屋一部に演舞場の外観がそのまま残されています。この新町演舞場はかつては新町座といい、明治21年(1888年)、俳優の角藤定憲が神原清三郎、横田金馬らとともに「大日本壮士改良演劇会」の旗揚げ公演を挙行し、西日本各地を巡演しました。自由民権運動に影響された政治批判の壮士芝居で、これに刺激されて川上音二郎のオッペケペー節などが生まれてきます。改良演劇発祥の地として、新町南公園内に石碑があります。

⑫ 四ツ橋

四ツ橋は、長堀川・西横堀川に架かっていた炭屋橋・古野屋橋・上繫橋・下繫橋の総称です。2つの川に4つの橋が東西南北に交差して井桁状に架かっている珍しさから、浪花随一の名所でした。「摂津名所図会大成」によると「此地の名物として煙管店軒をならべ、種々様々の形せし品ありて、買手の望みに任す」とあり、「四ツ橋煙管」が名産だったことがわかります。天保8年(1837)には幕吏に追われた大塩平八郎父子が船で逃走中に、四ツ橋の下で刃を河中に投げ捨てたといひます。また昭和12年(1937)には、四ツ橋北西角に東洋初のプラネタリウムが置かれた大阪市立電気科学館が誕生。少年時代の手塚治虫が足繁く通って、後年、「鉄腕アトム」などのSF漫画を作るさいに大いにイメージを活用したそうです。小西来山の「涼しさに 四ツ橋を四つ わたりけり」。上島鬼貫の「後の月 入りて 貌よし 星の空」の句碑が建てられています。

① 玉造橋交差点

かつてあった玉造橋が交差点名の由来です。玉造の名は17世紀半ば、大坂城・玉造口の与力・同心が増員のため、移転させられたことによります。

② 伯楽橋

明治41年(1908)、市電東西線開通に合わせて架橋。西詰めに開かれた松島遊郭の圧力で、昭和15年(1940)まで、市電専用橋で歩行者は通れませんでした。伯楽というのは「莊子」に登場する中国・周代にいた馬の良し悪しを見分ける名人のことで、そこから牛馬の売買・仲介者、病氣などを治す医者のことなどを指す言葉になりました(伯楽の音変化で博勞、馬喰ともいひます)。木津川が日本全国の物産の集積地になると、このあたりは陸上輸送の拠点になり、荷馬車の業者が集まったことから、そのような橋名になったと推測されています。

③ 土佐稲荷神社(三菱発祥の地 岩崎家旧邸跡)

かつては土佐藩蔵屋敷があり、米穀、材木、鯉節、和紙、砂糖など土佐の特産物が扱われました。古くから屋敷内に稲荷社がありましたが、享保2年(1717)に藩主・山内豊隆が社殿を造営。江戸時代より桜の名所として有名になり、境内には宝井其角の「明星や桜定めぬ山かつら」の句碑があります。明治2年(1869)、岩崎彌太郎が土佐藩のお手先商法である「開成館貨殖局大阪出張所」の幹事心得となり、大阪事務所を指揮して汽船・武器の輸入に活躍。翌年、廃藩置県が行われるとの情報で後藤象二郎、坂垣退助らと協議して長堀川北岸に事務所を置き、藩から独立した九十九商會を設立、土佐藩の負債を肩代わりする条件で船3隻を入手して海運業を始めました。廃藩置県後、一旦、三川商會となり、明治6年(1873)3月、三菱商會と改称。これが三井、住友と並ぶ日本三大財閥のひとつ、三菱財閥の起こりです。土佐稲荷神社は三菱発祥の地で、彌太郎は、土佐藩主・山内家の三ツ柏紋と岩崎家の三階菱紋の家紋を合わせて社章(スリーダイヤ)を作りましたが、土佐稲荷神社の社紋の中にもスリーダイヤが入っています。岩崎彌太郎邸宅跡の碑があり、神社を囲む玉垣なども三菱系列の会社が寄進しています。また第12代横綱・陣幕久五郎が寄進した狛犬が現存しています。

④ 鯉座橋交差点

鯉座橋は元和8年(1622)の長堀川開削から明暦元年(1655)までの間に架設されたと考えられています。鯉節を売買する鯉座があったことが橋名の由来で、また土佐殿橋とも呼ばれました。江戸時代は鯉座橋と玉造橋の間に土佐藩大阪蔵屋敷があり、土佐廻船によって鯉節を始めとする海産物、材木などが大量に陸揚げされ、盛況を極めました。

⑤ あみだ池大黒

創業文化2年(1805)。長堀川畔には西国大名らの蔵屋敷が建ち並び、年貢米を運んできた船が数多く停泊していました。あみだ池大黒の初代・小林林之助氏は、その船底にたまる余剰米に目をつけて、おこしの原料にすることを思いつきました。日露戦争時には、明治天皇より戦地への慰問品として送られる恩賜の菓子として阿彌陀池大黒のおこしが選ばれ、3代目・小林利昌氏は不眠不休で生産に励んで35万箱を3ヶ月の納期内に完納しました。おこしは兵隊達の人気を博し、昭和20年(1945)まで宮内庁御用達となります。全国各地から集められた約3500体の大黒様を集めた蔵は、第2次大戦の戦火でも焼け残りしました。

⑥ 和光寺(阿彌陀池)

阿彌陀池は古代からあって、霊水が湧く有難い池で、廃仏派の物部氏によって池に投げ捨てられた阿彌陀如来が、推古天皇6年(600)に信濃の住人・本田善光に拾われて善光寺まで運ばれたという言い伝えがあります。元禄11年(1698)、堀江川が開削され、堀江新地の区画整理が始まると、翌年、長野・善光寺から智善上人を迎えて、阿彌陀池のほとりに和光寺を建て、善光寺本堂に安置されていた阿彌陀仏を本尊としてお祀りしました。境内及び周辺には講釈の寄席、浄瑠璃の席、軽業の見世物などが並び、2月の涅槃絵や、4月の仏生会の植木市は、こと賑やかであったといひます。



大阪あそ歩のコースは約2~3km、2~3時間程度を基準として作成されています。